

【論文】

磐田市合代島古墳出土馬具の研究

大谷 宏治

要旨 磐田市合代島古墳から出土した静岡大学が所蔵する馬具について実測調査を行い、報告した。その後透十字文心葉形鏡板付轡を属性の特徴により、合代島古墳出土轡などのX類と、それ以外のY類に分類し、X類は6世紀前半の倭の伝統的な金銅装鏡板付轡の生産に新羅圏、大伽耶圏の馬具生産の影響が加わることで成立したことを論じた。また、X類をこれまでの研究を参考にⅢ期4段階に区分し、Ⅱ段階に銜留部覆金具及び銜と鏡板の連結方法の変化だけではなく、馬具の組合せにも変化があったことを論じた。さらに、合代島古墳から出土されたとされる三累環頭大刀が、今回報告した馬具と同一の古墳から出土したかを、他の古墳の共伴例から検討したが、透十字文心葉形鏡板付轡と三累環頭大刀の共伴事例はなく確証は得られなかつたため、今後の更なる検討が必要であることを論じた。最後に出土馬具から合代島古墳は地域の最上位ではないが、有力古墳の一つであったことを明らかにした。

キーワード：合代島古墳 上神増A1号墳 透十字文心葉形鏡板付轡 古墳時代後期

1 はじめに

筆者は静岡大学教授（当時）滝沢誠氏から、静岡大学考古学研究室に「豊岡村合代島古墳出土」と書かれた金銅装馬具（写真1）が所蔵されており、筆者らが新東名高速道路建設に先立ち発掘調査を実施し、報告書を刊行した、いわゆる「合代島丘陵」の古墳群（静岡県埋文研 2010）から出土したものである可能性が高いのではないかと紹介された。馬具を実見すると、金銅装馬具で轡と雲珠があり、後述するように非常に貴重な資料であることから、研究者をはじめ広く周知した方がよい資料と判断した。そこで静岡大学考古学研究室に調査と公開をしたい旨を申し出たところ快諾をいただいたため、実測調査を行い、ここに紹介するとともに、若干の考察を試みたい。

2 合代島古墳について

位置 広い意味での合代島古墳群は、旧静岡県磐田郡豊岡村（現磐田市）に位置し、南側の磐田原台地と北側の赤石山系本宮山から延びる丘陵に挟まれた、いわゆる「合代島」丘陵の尾根上と、その尾根斜面に築造された古墳群で形成される（図1・2）。この丘陵上に築造された古墳群は、埋蔵文化財包蔵地上「合代島古墳群」（A・B・Cの3支群）と上神増古墳群（A～Fの6支群、旧押越古墳群・社山古墳群を含む）、新平山古墳群（A・Bの2支群）、新林古墳群に区分されている（図2、静岡県埋文研 2010）。筆者は上神増古墳群の発掘調査の際にこの合代島丘陵上の古墳群を実見し、いくつかの古墳で横穴式石室が開口していることを確認している。上神増古墳群の既往調査の古



写真1 静岡大学に保管された合代島古墳出土馬具

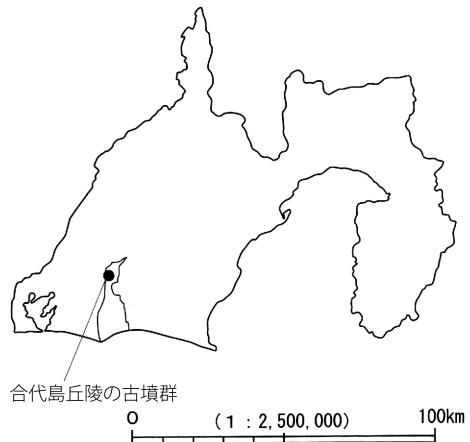


図1 合代島丘陵の古墳群の位置

墳の様相や古墳の臨地確認の所見から判断して、金銅装馬具等が副葬された可能性が高いのは丘陵頂部にある墳丘がやや大きい古墳で、盗掘などにより開口している横穴式石室をもつ古墳である可能性が高い。

馬具の出土経過と静岡大学が収蔵に至る経緯 「合代島古墳」については、古く『静岡縣史』（静岡縣 1930、以下「旧県史」とする）に西郷藤八氏により当

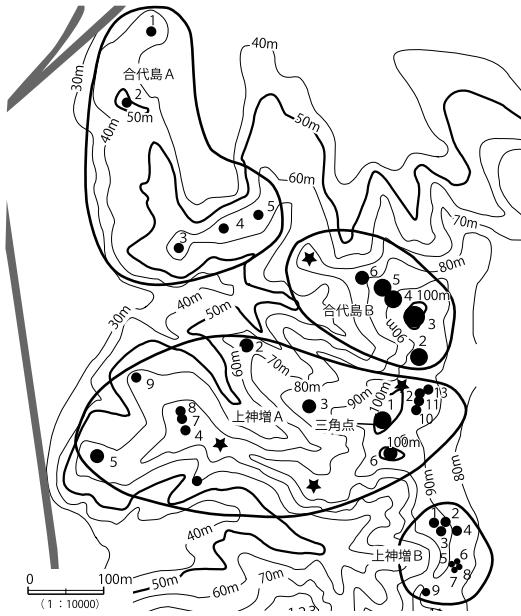


図2 現在の合代島丘陵の古墳群分布図

古墳群4基について報告されている（註1。註1に報文を再録）。この報告により明治30（1900）年頃に発掘（調査ではない）で遺物が出土したことが判明している。ただし、旧県史には「合代島古墳」から出土したとされる三累環頭大刀（図4）は略図が報告されているが金銅装馬具が出土したとの報告はない。

なお、「合代島古墳」については、合代島丘陵の古墳群のどの古墳に該当するかはおおむね想定できるが、完全に一致するか不明である。旧県史に報告された合代島の古墳群4基のうち、金銅装の遺物が出土したと記述があるのは1号墳（金銅装刀装具）であり、当該古墳は標高105m付近の三角点が設置された場所にある古墳であるという。この報告からみて、可能性が最も高いのは現在三角点のある場所（図2・3）に築造されている上神増A1号墳の蓋然性が極めて高い。報告通りであれば当古墳からは金銅装刀装具とともに馬具が出土した可能性があるが不明確である（註2）。ただし、旧県史に報告された「合代島古墳」と、静岡大学が所蔵する「合代島古墳」とされる古墳が同一と確定できる根拠はない。合代島古墳群、上神増古墳群とともに比較的墳丘が大きな古墳は丘陵尾根上に築

造されたものであり、金銅装馬具や装飾付大刀は頂部の古墳、上神増A1・6号墳あるいは合代島B2・3号墳から出土した可能性が高いと想定する。

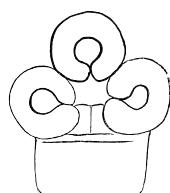


図4 合代島古墳群出土柄頭 また、旧県史に報告された合代島から出土したとされる三累環頭

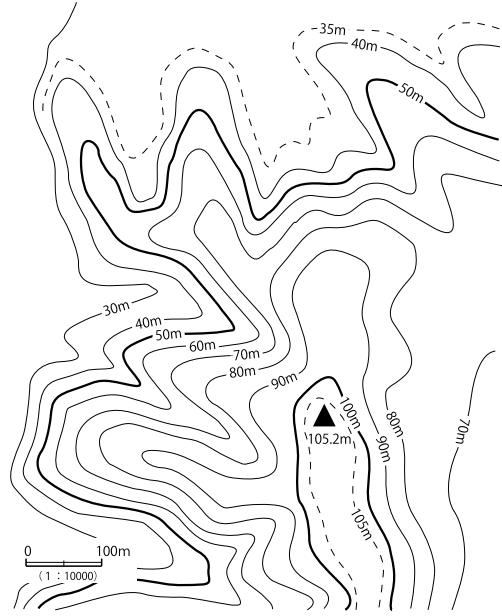


図3 大正6年測量図における三角点の位置

大刀（註3、図4）も出所は明らかではなく、ここに報告する金銅装馬具出土古墳と同一古墳から出土した確証はない（第5章で検討する）。

なお、静岡大学考古学研究室が所蔵に至った時期やその経緯は不明である。

3 合代島古墳出土馬具について

「合代島古墳」出土とされ、静岡大学考古学研究室が所蔵する馬具は、金銅装透十字文（十字文透）心葉形鏡板付轡（以下、透十字文心葉形轡とする）1組と、それに伴う銜・引手1点、そして金銅装半球形雲珠1点である（図5、写真2）。

金銅装透十字文心葉形鏡板付轡 鏡板2点、銜・引手・鏡板の銜留金具がある。鏡板は、小型矩形の立聞である。立聞には吊金具の吊脚が残存している。鏡板は透十字文の鉄製地板に、金銅装の文様板（飾板、上板）を被せ、外縁と十字文との連結部分に各1鉢を打ち込んで鉢留めしたものである。鉢は半球形の傘鉢である。銜との連結部分は文様板とは別に半球形の突起をもつ方形の金銅装銜留部覆金具（以下、覆金具）が取り付けられている。覆金具の四隅に金銅装鉢が打たれている。鏡板は橢円形に近いものである。銜留金具は、地板と文様板の間に挟み込まれる。Aは、立聞上部が欠損しているが、Bとの長さを比較するとほぼ同じであることから欠損部分は少ないと想定する。残存高10.7cm、幅10.1cm、立聞を除く高さ8.4cm、立聞幅2.1cm、立聞長2.3cm以上である。立聞孔は高さ5mm、幅約1cmである。覆金具は高さ2.8cm、幅3.3cmであ

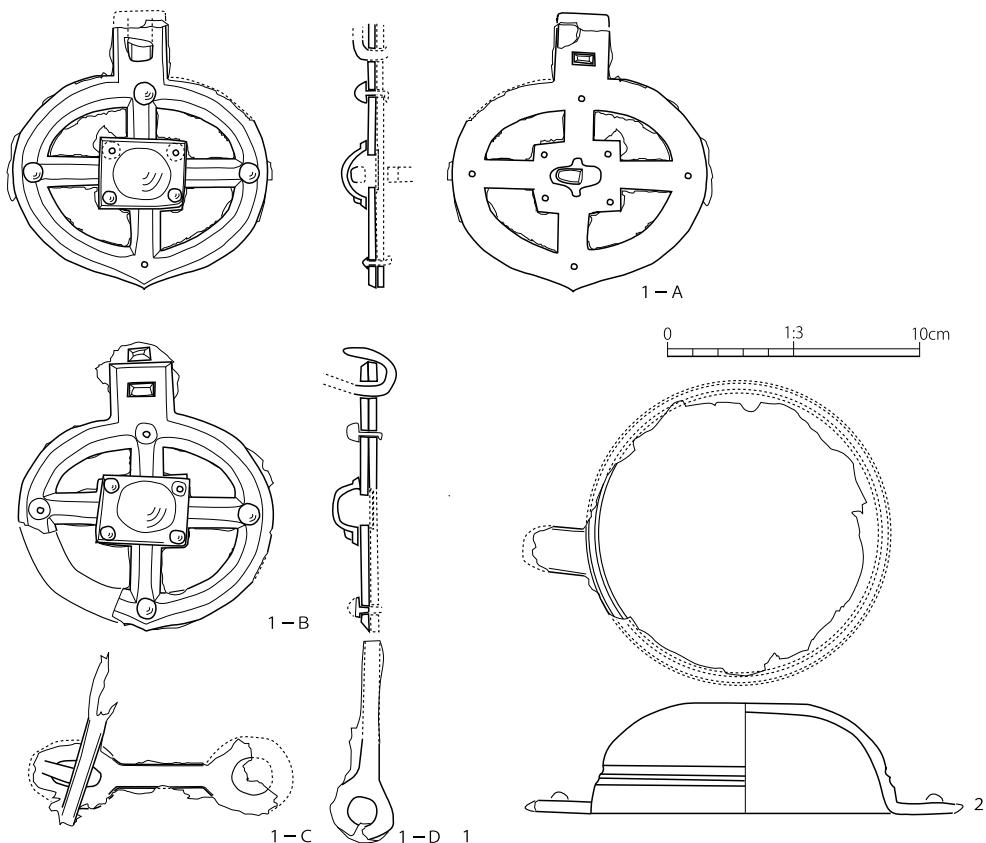


図5 合代島古墳出土馬具実測図



写真2 合代島古墳出土透十字文心葉形鏡板付轡

る。銜留金具を装着する十字部分は、高さ 1.5 cm、幅 2.0 cm である。地板と文様板を固定する鉢は笠の直径 8 mm 前後であり、覆金具の留め鉢は 5 mm 前後である。吊金具の脚幅 9 mm である。B は、全高 10.7 cm、幅 10.1 cm、立聞高 2.0 cm、幅 2.5 cm、立聞孔幅 1.0 cm である。覆金具はやや不整形な長方形で、幅 3.6 cm、高さ 2.7 cm である。地板・文様板の方形銜留部と若干ずれている。鉢は、外枠に打たれる鉢が 0.8 cm、覆輪のものが 0.6 cm である。銜留金具は地板と文様板の間に取り付けられている。文様板はこの銜留金具を装着するために、銜留金具が当る部分は細長い切れ込みが入れられ、十

字形に切りこまれている。ただし銜留金具を装着するための鉢孔は確認できないことから、銜留金具はこの十字部分に嵌めて文様板と地板で挟み込んで固定していたと想定する。

この轡の特徴は、松尾充晶氏による連結方法の I 類（第4章（1）「松尾充晶の研究」参照）に区分でき、図6のような組み合わせ方をして製作されたと想定できる（松尾 1999）。

金銅装半球形雲珠 上記の轡と同じ収納ケースに納められたものである。有脚の半球形鉢をもつ雲珠で、8 脚以上であった可能性が高いが、脚部や責金具は失

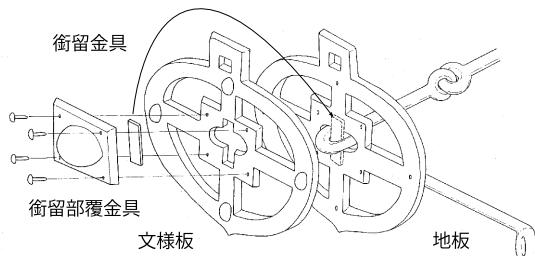


図6 合代島古墳出土轡の衡・鏡板・引手の連結方法

われ、半球部分も劣化が進んでいることから何脚であったのか不明である。

鉢部分には稜（傾斜変換点）はなく、その頂部はほぼ水平で穿孔はないことから、宝珠飾やその座金具は伴わないことが明らかである。鉢の裾は有段であり、3段確認できる。宮代栄一氏による雲珠分類の「半球状鉢」に区分でき、「半球状鉢半円形脚1鉢系」か「半球状鉢半円形脚3鉢系」に該当する可能性が高い（宮代1996b）が、残存する脚部には鉢孔は確認できないことから、破損部に1鉢あった「1鉢系」の可能性が高い。

4 合代島古墳出土轡の検討

（1）透十字文心葉形鏡板付轡の研究史

合代島古墳出土轡の位置づけを考えるにあたり、透十字文心葉形轡についての研究史を確認しておきたい。

西山良一の研究 西山良一氏は透十字文心葉形轡（後述する筆者のX類）は、二連衡で引手壺を別造りしないという特徴が共通する一方で、鏡板と衡の連結方法や衡留部覆金具の形状の違いを指摘し、覆金具は十字→菱形→方形へと、衡留部は別造りの覆金具から鏡板と一体造りの覆金具へ変化するとした（西山1987）。この分類と変遷観は卓見であり、30年経過した今でも変更の必要性は生じていない。

内山敏行の研究 内山敏行氏は、日本列島出土の轡と杏葉の変遷過程を概観する中で、透十字文心葉形轡は、後期2段階（TK10型式期）に祖形となる轡が出現し、その影響を受け、後期3段階（TK43型式期）に創出されたと想定する（内山1996）。

松尾充晶の研究 松尾充晶氏（松尾1999）は透十字文心葉形轡を、衡と鏡板の連結方法によりI類=連結軸を使用し、別造りの覆金具をかぶせるもの、II類=連結軸を使用し、上板と一体造りの覆部をかぶせるもの、III類=衡先端をかしめて固定し、上板と一体造

りの覆部をかぶせるもの、の3類に分類し、鏡板の鉢数と位置、鏡板の形態を合わせた3属性により、外縁の鉢数が多鉢（6鉢）→少鉢（4鉢）へ、鏡板と衡の連結方法及び覆金具の構造がI類→II類→III類へ、鏡板の形状が円形→横長・楕円に変化するとし、当轡群を4段階—I段階は、連結方法I類、多鉢、円形平面、II段階は連結方法I類、少鉢、平面横長・楕円形、III段階は連結方法II類、少鉢、平面横長・楕円形、IV段階は連結方法III類、少鉢、平面横長・楕円形に区分した。時期はI～II段階をTK43、III段階をTK43～209、IV段階をTK209型式併行期に位置づけている。また、当轡群は基本的に杏葉を伴わないことも明らかにした。

古川 匠の研究 古川匠氏は、金銅装馬具の鉢に着目し、轡、杏葉、辻金具、雲珠の馬具セットを種類ごとに鉢の規格性を検討し、日本列島での「国産化」を検討する中で、透十字文心葉形轡は、鏡板での鉢の規格性も少なく、また共伴する辻金具・雲珠との共通性も低いことを論じた（古川2007）。

桃崎祐輔の研究 桃崎祐輔氏は、多くの形式の馬具を検討材料として九州の地域間交流の分析を進める中で、透十字文心葉形轡（後述する筆者のX/Y類の両方）を集成し、7段階に分類した。変遷過程は松尾氏とほぼ同じであるが、より細分している。当轡群の祖形とする馬具についても松尾充晶氏と同じものを取り上げている。また、同じく透造となる車輪文（斜格子文）楕円形轡が杏葉を伴うのに対し、当轡は杏葉を伴わないことが特徴であるとする。さらに、桃崎氏はこの轡が、「額田部臣」銘大刀が出土した島根県岡田山1古墳から出土していることなどを根拠に、額田部氏と関係が深いことを想定した（桃崎2014）。

共通認識 これまでの研究により、透十字文心葉形轡（筆者のX類）は、二連衡で、引手の内側で連結する構造が特徴であり、TK43型式期に出現し、TK209型式期まで短期間に製造されたこと、衡留部覆金具が文様板とは別造りから文様板と一体造り、衡と鏡板の連結方法が衡留金具を衡先環を通して連結する方法から、衡先環に突起を造りそれを鏡板に通して連結する（リベット留）に変遷すること、外縁部の鉢数が6鉢→4鉢へ変遷することが明らかにされた。また、透造が確認される車輪文（斜格子文、以下車輪文）楕円形（心葉形）鏡板付轡（以下、鏡板付轡は「轡」と省略する）と花形鉢を有する点、吊金具が共通する点、覆金具に菱形のものがあることなどから透十字文心葉形轡と近

しい関係にあることが想定された。さらに透十字文心葉形轡は辻金具・雲珠は組み合わさるもの杏葉が伴うことは少ないことが、概ね共通認識といえる。

課題 透十字文心葉形轡（後述するX類）は韓国高靈池山洞出土例、大阪府海北塚古墳、宮崎県持田56号墳・西都原古墳群出土十字文心葉形轡を祖形として、福岡県寿命王塚古墳の十字形覆金具をもつ楕円形鏡板付轡を参考にしながら倭で創出されたと考えられている（西山1987、松尾1999ほか）。このうち前4者の十字文心葉形轡例は銜留部覆金具をもつが、その設置方法が神啓崇氏のA類（別造りの覆金具を地板と文様板の間に挟む）に対し、透十字文心葉形轡はB3類（別造覆金具を文様板の上（外側）に銜留めする）である。神氏A類は日本列島にはあまり確認されないものである一方で、B3類は倭で通有のものであるなど、差異が大きい（神2016）。また、祖形とされる轡の銜留部は楕円形であるのに対し、透十字文心葉形轡は方形あるいは菱形である。菱形覆金具は福岡県寿命王塚古墳例が祖形として挙げられている（松尾1999）が、方形覆金具の祖形は示されていない。したがって、池山洞例・海北塚例・持田56号墳例・西都原例、寿命王塚古墳例の影響だけでは当該轡は成立しないと考える。

また、透十字文心葉形轡（X類）については、銜数の寡少化（6銜→4銜）、銜と鏡板の連結方法の相違により区分されているが、その他の属性での変化が確認できるのか検証されていない。

さらに、透十字文心葉形轡は辻金具・雲珠（・鞍金具）は有するものの大部分が杏葉は伴わないが、上塙治築山古墳や静岡県宗小路19号墳（註4）では杏葉を伴う事例もあり、この違いは何に起因するのかが検証されていない。

上記のような課題があることから、小論では透十字文心葉形轡の成立、展開について検証するとともに、他の要素の変化との関係、杏葉を有する事例と有さない事例の違いについて検討したい。

（2）透十字文心葉形鏡板付轡の分類

透十字文心葉形轡は、①小型矩形立聞、②銜留部覆金具、③長方形の銜留部、④鏡板の内側で引手を連結、⑤帶状（鉤状）吊金具という特徴をもつX類と、①大型矩形立聞、②覆金具なし、③楕円形・方形銜留部、④鏡板の外側で引手を連結、⑤幅広帶状吊金具）という特徴を有するY類に区分できる。

（3）透十字文心葉形鏡板付轡（X類）の各属性

桃崎祐輔氏は、全ての透十字文心葉形轡を同一の変遷図の中に位置づけ、同様の性格を持つと考えているようである（桃崎2014）が、筆者はX・Y類は後述するように別系譜と考えることから、ここで検討するのは合代島古墳例が属するX類とする。

X類の主な属性は、心葉形鏡板、透造（透十字文）、小型矩形立聞、花形鉢、帶状吊金具、方形銜留部、銜留部覆金具、鏡板の内側で引手を連結することである。

心葉形鏡板 主体的には内山後2期（TK10型式期）に出現する（内山1996）。

透十字文 十字文は前段階の十字文楕円形鏡板付轡などで確認できるが、透造となるとTK10段階には確認できない。透一字文楕円形轡は福岡県日拝塚古墳（TK10型式頃）などで、透車輪文轡は京都府鹿谷古墳（MT85型式）で確認されているが、十字文透造は最も古いもので静岡県大ヶ谷I-1号横穴墓例であり、MT85型式期に遡る可能性はあるもののおおむねTK43型式期である。この他、共伴した棘葉形杏葉からTK43型式に位置づけられる熊本県才園2号墳例、熱田神宮蔵例（有機質の地を伴う可能性あるため透造ではない可能性あり）があり、透十字文心葉形轡と同時期に出現しており、その影響関係は捉え難い。つまり、透十字文はTK10～MT85型式ごろに出現している透一字文や透車輪文、あるいは透十字文心葉形轡（X類）の出現とほぼ同時期の大ヶ谷I-1号横穴墓例の影響を受けて成立した可能性が高い。

小型矩形立聞 小型矩形立聞は、松尾氏らが想定する透十字文の祖形とされる心葉形轡に採用されているが、倭では5世紀後半から6世紀後半にかけて金銅装轡・杏葉の主体的な立聞の形状であり、どちらの影響と断定することは難しい。

花形鉢 花形鉢は、韓国池山洞例、海北塚古墳例などで確認できるが、現状では韓国では大加耶圏のみで確認されており、大伽耶圏からの影響が想定できる（神2016）。

なお、韓国池山洞出土の透十字文心葉形轡や、奈良県巨勢山421号墳出土の透一字文心葉形杏葉（御所市2002）は、外縁の銜留部に突起が確認でき、奈良県護国神社4号墳例（図8の14）と共に通する。この突起は池山洞例をみれば、花形鉢の花びら（弁）を模している可能性が高い。

帶状吊金具 鉢が縦一列に並ぶ吊金具は海北塚古墳例などに確認されている。車輪文楕円形轡や小型矩形

立聞環状鏡板付轡と共に通するものであり、この3者の製作作者集団が近しい関係にあったことが想定できる。

方形銜留部 轡の銜留部は楕円形が一般的で、f字形轡、十字文楕円形轡、鐘形轡など多くの形式で採用されるが、方形銜留部を有するもので現在確認できるのは心葉形轡のみで、特に透十字文心葉形轡（X類・Y類）、十字文心葉形轡、唐草文心葉形轡に確認できる属性である。

今回検討している合代島古墳例などの透十字文心葉形轡（X類）のほか、TK10型式併行期の韓国釜山杜邱洞林石5号墳の十字文心葉形轡、大分県朝日天神山1号墳（天満古墳）の（無文）心葉形轡、TK43型式期の静岡県宇洞ヶ谷横穴墓、（TK43～）TK209型式期の長崎県笹塚古墳、および静岡県御小屋原古墳の唐草文心葉形轡、TK209型式の群馬県しどめ塚古墳、鳥取県小畑3号墳の透十字文心葉形轡（Y類）、飛鳥I期以降の滋賀県中山古墳、三重県塚山古墳群の透十字文心葉形轡（Y類）がある（図7）。

このうち、透十字文心葉形轡成立よりも前に位置づけられる林石5号墳、朝日天神山1号墳は新羅系とされる棘葉形杏葉が共伴する。TK43～TK209型式期の方形銜留部も、新羅系の特徴を有する轡にのみ確認できる属性である。しかし、方形銜留部は現状では新羅中心地ではなく釜山林石5号墳例のみで確認されるものであることから、新羅で生産されたかは慎重に判断する必要があり、方形銜留部は新羅の影響を受けた広域新羅圏、大伽耶圏と考えておくのが妥当である。

（4）透十字文心葉形鏡板付轡の成立

以上、（3）で透十字文心葉形轡の各属性の出現時

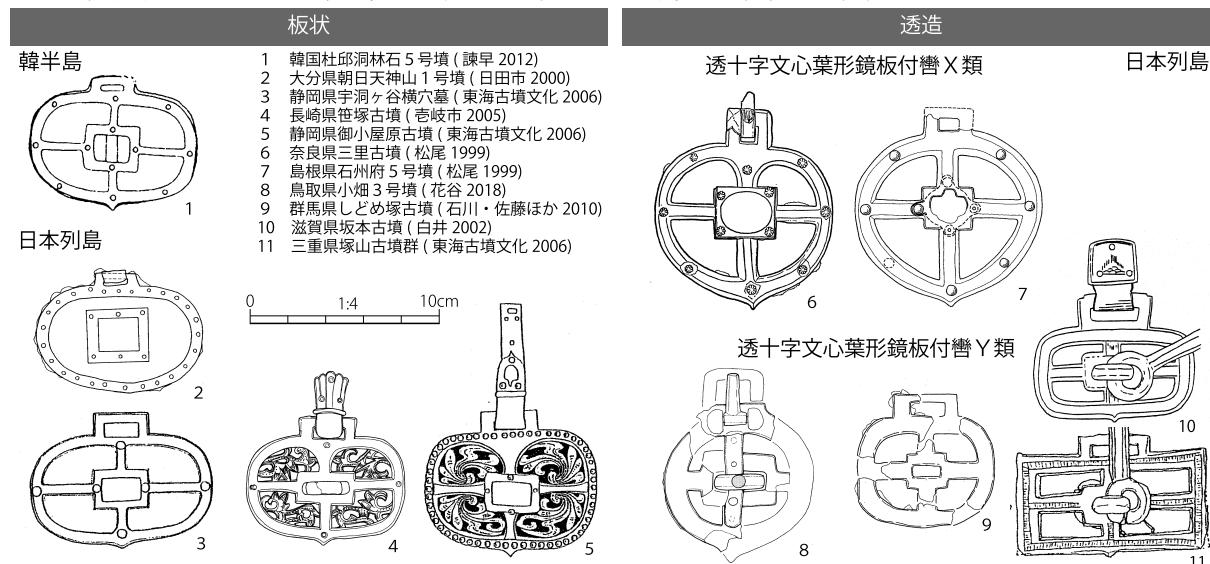


図7 方形銜留部をもつ轡

期等を確認した。ここでは、当該轡の成立について考えたい。

韓半島では、十字文心葉形、楕円形覆金具、花形鉢は大加耶地域で確認される。ただし、諫早直人氏は、松尾氏、桃崎氏らが透十字文心葉形轡の祖形とした池山洞出土の轡・杏葉などを、諫早氏の大伽耶V段階（6世紀中ごろ）に位置づけ、それ以前の大伽耶の馬具とは様相が異なり、帶状吊金具の採用から新羅の影響を想定するが、大伽耶で生産されたとする（諫早2012）。ここで注目すべきはMT85～TK43型式期に位置づけられる静岡県大ヶ谷I-1号横穴墓例（大谷2013）で、透十字文心葉形轡である可能性が高いが、この古墳からは辻金具か雲珠の脚部に半球形金具が装着される特徴的な構造の馬具が確認されている（註5）。この類例は韓国高靈池山洞古墳群出土とされる雲珠に確認することができる。したがって、透十字文心葉形轡も大伽耶圏で生産され倭にもたらされたか、あるいはその強い影響のもと倭で生産された可能性が高い。

また、方形銜留部は洛東江西岸の釜山（金官加耶）で出土しているが、棘葉形杏葉が伴うことから新羅の影響が強まった時期の大伽耶圏に位置づけられる可能性が高い。一方、透十字文心葉形轡の特徴である、小型矩形立聞、銜留部覆金具、鏡板の内側で引手を連結する構造は新羅圏には見られない特徴である。また、祖形とされる池山洞や海北塚古墳は、小形矩形立聞であるが、心葉形轡の引手などとの組み合わせ方法や覆金具の構造が異なることから、倭の伝統を継承したものと想定する。

つまり、透十字文心葉形轡（X類）は、楕円形銜留部覆金具、引手を鏡板の内側で連結する構造など倭の

伝統に方形銜留部や花形鉢の採用など新羅圏の影響を受けた金官加耶を含む大加耶地域からの情報を取り入れながら、透造、吊金具や銜留部覆金具、花形鉢などが共通する車輪文楕円形轡とともに倭で創出された。これには、韓半島からの渡来工人がかかわっていた可能性も考慮する必要がある。

（5）透十字文心葉形鏡板付轡（X類）の時期的変遷

I段階（成立期・展開期） 上述したように透十字文心葉形轡は、倭の伝統や新羅地域の影響を受けた大加耶地域の馬具生産の影響を受け、6世紀後半（TK43型式期）に花形鉢を有し、方形銜留部覆金具を有する三里古墳例や菱形覆金具を有する石州府5号墳例が創出される。いずれも、覆金具を別造りするもので外枠に6鉢配置する。松尾充晶氏の連結方法を基準に段階区分し、鏡板と銜の連結方法（松尾I類）をI段階とし、なかでも外縁に6鉢配置する三里古墳例、石州府5号墳例を透十字文心葉形轡（X類）のI-1段階（松尾I段階）とする。

一方、同じく連結方法は松尾I類であるが外縁に配置する鉢が4鉢のものをI-2段階（松尾II段階）とする。透十字文心葉形轡（X類）は、この段階のものが最も多い。松尾氏は、平面形状で楕円形に近いものを古く位置付けるが、平面形状で判断することは研究者の主観が入りやすく判断が難しい。三里例と外縁と十字文の上部の接合部が円弧という共通性がある栃木県大塚新田古墳群例、石州府5号墳例と菱形覆金具が共通する法皇塚例、花形鉢の痕跡が残る護国神社4号墳例がやや古い可能性がある。また、鏡板の形状での時期差の判断は難しいが、共伴する雲珠・辻金具の脚部の形状が半円形のものと心葉形のものがあり、後者の辻金具・雲珠を共伴するほうが新しい可能性がある。

したがって、I-2段階までは、I-1段階の複数の系譜の痕跡が残るが、I-2段階にはI-1段階に見られた菱形覆金具や花形鉢・棘状突起が確認できなくなることから、I-2段階中に、製作工人集団での規範が確立し、定形的な透十字文心葉形轡（X類）が量産される。前段階の痕跡の有無や、組み合わさる雲珠や辻金具の特徴によりI-2段階の中での時期差が判断できる可能性がある。

なお、I段階のX類には金属製の杏葉を伴う可能性は極めて低い（西山1987、松尾1999ほか）。ただし、雲珠は共伴することから、有機質の杏葉が伴っていた可能性を考慮しておく必要がある。また、共伴する雲

珠・辻金具は、鉢部が有段で、脚部に1鉢打たれる1鉢系が組み合わされることが多いのがわかる（図9）。

II段階（転換期） II段階（松尾III段階）は、銜留覆金具と文様板が一体で製作される段階（松尾II類）であり、上塩治築山古墳、栃木県赤麻古墳例がある。組み合わさる辻金具・雲珠は、I段階のものは原則脚部が1鉢系である（図9）が、上塩治築山古墳例は3鉢系である。また、I段階は杏葉を伴わないが、上塩治築山古墳では杏葉を伴う（図9）など、鏡板の構造だけではなく、馬具の組成（の考え方）も大きく変化した可能性がある。

なお、II段階には、地板・文様板は透造であるが、金銅板は透造ではなく全体を覆う事例（静岡県宗小路19号墳）がある。金銅板の被せ方以外は、上塩治築山古墳例、赤麻古墳例と同様であり、同時期に位置づけられる。春岡2号墳（註6）の車輪文楕円形轡と同様の金銅板の被せ方を採用しており、車輪文楕円形轡の生産に近い関係にあることがわかる。

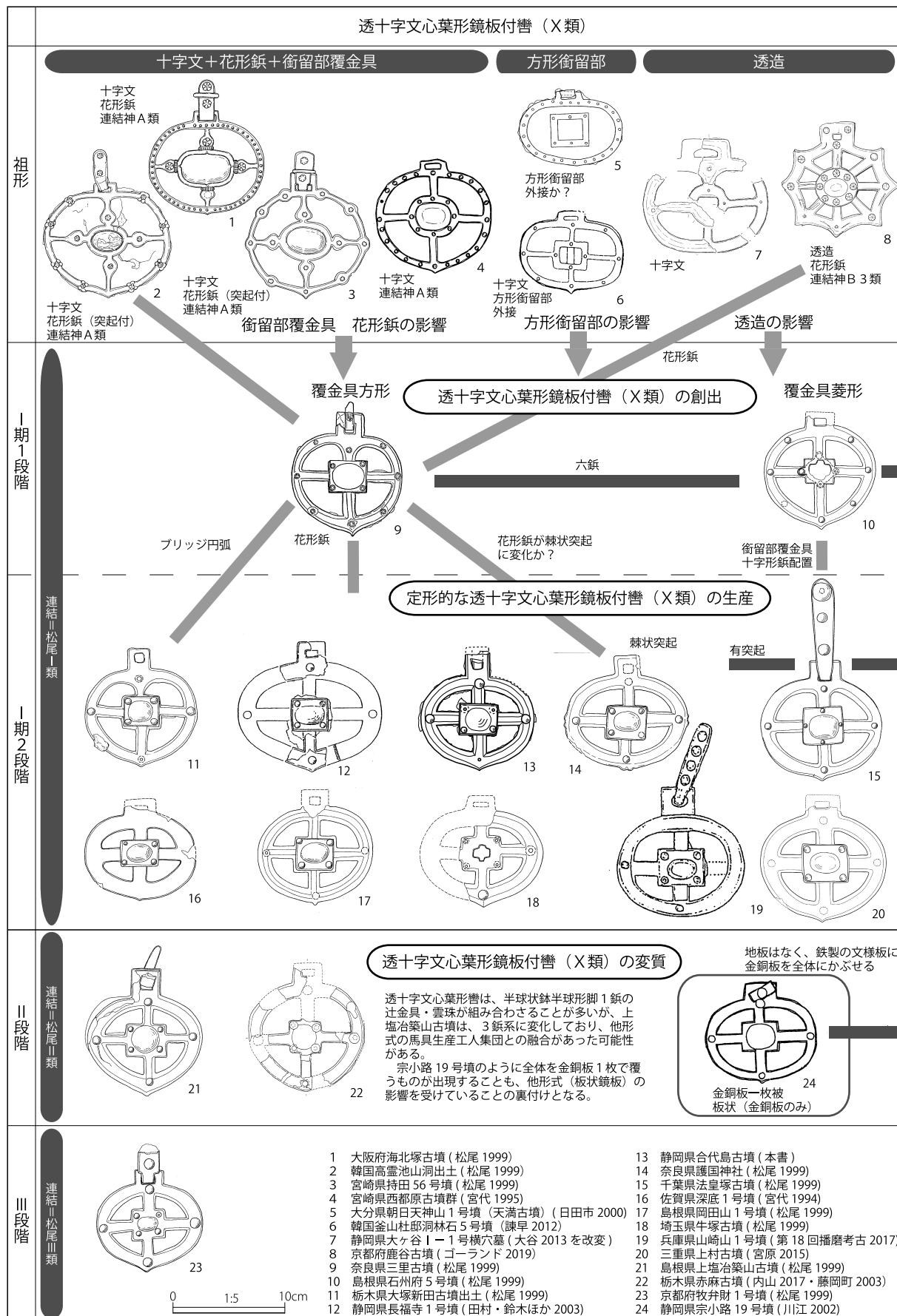
したがって、II段階には鏡板と銜の連結方法の変化（松尾I類からII類へ）だけではなく、馬装の組合せに対する意識や金銅板の被せ方など定型的な轡を生産するI-2段階の生産体制とは異なり、他の轡の影響を大きく受けていることから工人集団が再編された可能性がある。

III段階（終末期） III段階（松尾IV段階）は、銜留覆金具が文様板と一体造され、銜留金具を銜先に通して連結する方法から、銜先を突起させ、鏡板の孔に通した後先端をかしめて固定する（松尾III類）で、京都府牧弁財1号墳例が該当する。これ以外には現状で確認できないが、鏡板の固定方法はその他の轡の変遷過程と同一であることから他の轡生産と連動して変遷した可能性が高い。

II・III段階の変化は金銅装轡全体の変化の方向性と合致しており、また後述する車輪文楕円形・心葉形轡・杏葉もこの段階で変化することから、馬具生産体制が集約・再編された可能性も考慮しておく必要がある。

（6）車輪文鏡板付轡、透十字文心葉形鏡板付轡（Y類）との関係

車輪文楕円形・心葉形轡は、透十字文心葉形轡（X類）より若干早いかほぼ同時期（TK43型式期）に出現する。このうち車輪文楕円形轡は、透十字文心葉形轡と花形鉢や透造、菱形銜留部覆金具などが共通する。一方、透十字文心葉形轡（Y類）は十字文透造、方形銜留部



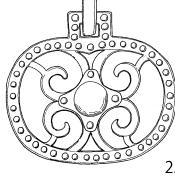
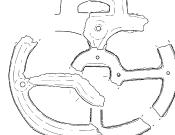
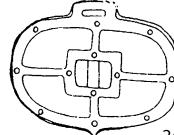
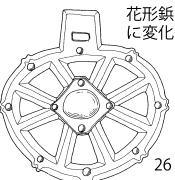
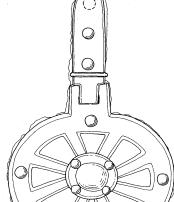
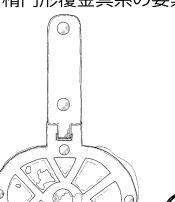
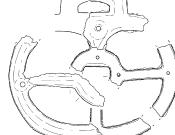
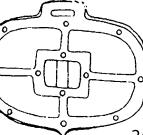
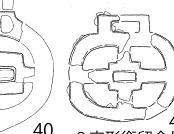
<p>車輪文（斜格子文）轡</p> <p>十字形覆金具</p>  <p>25 福岡県寿命王塚古墳（松尾 1999） 26 奈良県鳥土塚古墳（松尾 1999） 27 岡山県王墓山古墳（松尾 1999） 28 京都府黒土 1号墳（城陽市 2007） 29 千葉県城山 1号墳（松尾 1999） 30 福岡県新延大塚古墳（松尾 1999） 31 関西大学蔵（桃崎 2014） 32 茨城県風返稻荷山古墳（松尾 1999） 33 島根県中村 1号墳（出雲市 2012） 34 大分県城山 19号墳（桃崎 2014） 35 静岡県大ヶ谷 I – 1号横穴墓（大谷 2013 を改変） 36 韓国釜山杜郎洞林石 5号墳（諫早 2012） 37 愛知県熱田神宮蔵（出土地不明） （東海古墳文化研究会 2006） 38 静岡県宇洞ヶ谷横穴墓（東海古墳文化研究会 2006） 39 熊本県才園古墳（2号墳）（宮代 1999） 40 鳥取県小畠 3号墳（花谷 2018） 41 群馬県しどめ塚古墳（石川・佐藤ほか 2010） 42 佐・兵庫県香美町油良出土（大谷 2018） 43 滋賀県中山古墳（白井 2002） 44 三重県塚山古墳群（東海古墳文化研究会 2006）</p> <p>十字形覆金具の影響</p>  <p>透十字文心葉形鏡板付轡（Y類）</p> <p>透造</p>  <p>35</p> <p>板状</p>  <p>36</p> <p>方形銜留部</p> <p>SMT 85</p>	
<p>車輪文（車格子文）鏡板付轡の創出</p> <p>菱形覆金具系</p>  <p>26 花形鉢が棘状突起に変化か？ 有突起 板状</p> <p>春岡 2号墳</p> <p>透造の地板・文機板を金銅板で全体を覆う</p> <p>27 有突起 板状</p> <p>28 板状</p> <p>29 透造</p> <p>楕円形覆金具系</p>  <p>30 板状</p> <p>この段階の終わりごろに心葉形に変化か</p> <p>31</p> <p>透造</p> <p>透十字文</p>  <p>39</p> <p>方形銜留部の影響</p> <p>TK 435</p>	
<p>覆金具一体造りの松尾 II類の連結方法を採用するものはないか？</p> <p>菱形覆金具系と楕円形覆金具系の要素の融合</p> <p>松尾 III類の連結</p>  <p>32 有突起</p>  <p>33</p>  <p>34</p> <p>0 1.5 10cm</p> <p>毛彫り</p>  <p>42 8字形銜留金具</p> <p>方形銜留部</p> <p>※鏡板裏側に突起があり、有機質の地板を装着した可能性が高い。</p> <p>TK 2095 飛鳥 I ~ 飛鳥 II</p>	
<p>透十字文心葉形鏡板付轡（X類）と関連資料の展開②</p> <p>透造</p>  <p>35</p> <p>心葉形？鏡板付轡</p> <p>透造？（※）二重銜先環（8字形）</p>  <p>38</p> <p>板状</p> <p>方形銜留部</p> <p>透造</p> <p>透十字文</p>  <p>41</p> <p>8字形銜留金具 二重銜先環（交差形）方形銜留部 方形銜留部</p> <p>※鉢具造に変化か？透十字文</p> <p>TK 2095 飛鳥 I ~ 飛鳥 II</p>	

図 8-2 透十字文心葉形鏡板付轡（X類）と関連資料の展開②

古墳名	段階	辻金具		雲珠		杏葉 有無
		一鉢	三鉢	一鉢	三鉢	
奈良県三里古墳	I-1	★●	-	★	●	×
鳥取県石州府5号墳	I-1	★	-	-	-	×
栃木県大塚新田古墳群	I-2	-	-	★	-	×
千葉県法皇塚古墳	I-2	-	-	★	-	×
千葉県西原古墳	I-2	-	-	※	※	×
埼玉県牛塚古墳	I-2	★	★	-	-	×
静岡県長福寺1号墳	I-2	-	-	★?	-	?
静岡県合代島古墳	I-2	-	-	★	-	×
三重県上村古墳	I-2	●	-	★	-	×
奈良県護国神社境内4号墳	I-2	★	-	★	-	×
兵庫県山崎山1号墳	I-2	-	-	-	-	×
島根県岡田山1号墳	I-2	★	-	★	-	×
佐賀県深底1号墳	I-2	●	-	?	-	×
栃木県赤麻1号墳	II	●	-	-	-	×
島根県上塙治築山古墳	II	-	★	-	★	●
静岡県宗小路19号墳	II	★	●	-	●	●
京都府牧井財1号墳	III	●?	-	●?	-	×
伝茨城県出土	?	-	-	-	-	—
長野県小丸山古墳	?	-	-	-	-	×
福岡県欠山塚古墳群	?	-	-	-	-	—

★ 鉢部有段 ● 鉢部無段

※ 3点出土しているが、鉢数、有段無段確認できず。

図9 透十字文心葉形鏡板付轡と辻金具・雲珠

であることが共通点である。ここでは共通の属性を有する両者とのX類の関係についてみておきたい。

車輪文楕円形・心葉形鏡板付轡・杏葉との関係 車輪文を有する轡・杏葉は楕円形と心葉形が確認できるが、前者のほうが古い（桃崎2014）。松尾充晶氏は詳述していないが透十字文心葉形轡を検討する中で、その編年図では車輪文楕円形・心葉形轡は覆金具の形状により2種類に系列できることを示唆している（松尾1999）ことから、松尾氏の意見を参考に菱形覆金具系と楕円形覆金具系に区分する。菱形覆金具系は鳥塚古墳例や静岡県春岡2号墳例、岡山県王墓山古墳例と、透十字文心葉形轡と同様、鉢数が多いものから少ないものへ変化する。菱形覆金具系の特徴は、透十字文心葉形轡で確認された外縁の鉢留箇所を花形鉢の痕跡として突起させるものが確認できることである（鳥塚例、王墓山例。註7）。また、春岡2号墳例は鉤状吊金具で2鉢三段配置するもので、5世紀後半から6世紀前半にf字形轡、十字文楕円形轡、鐘形轡などに採用されたものと共通する。

一方、楕円形覆金具系も鉢数が多いものから少ないものへ変化するとともに、出現当初から千葉県城山1号墳例のような透造と、京都府黒土1号墳例のような板造の2者がある。楕円形覆金具系は幅の細い帶状吊金具か鉤状でも幅が狭く縦一列で鉢を配置するものが多く、透十字文心葉形轡と共に通する。

つまり、両系列ともに一部の要素は透十字文心葉形轡と共に通していること、現状では外縁の鉢留部に突起を有するものは、車輪文と透十字文心葉形轡（X類）の2形式のみに確認できる特徴であることから、強い

関連性をもって（松尾1999、桃崎2014）、倭で創出された。また、吊金具付小型矩形立闇環状鏡板付轡とも吊金具や辻金具・雲珠が1鉢系であることが共通しており、この3形式の馬具の生産集団が近い関係にあつたことが想定できる。

また、車輪文楕円形轡はI段階の終わりごろに心葉形轡が出現していることから心葉形轡の影響を受けたこと、鉤状吊金具で鉢が2列で構成されるものが1列であった楕円形覆金具系の轡にも採用されることから、心葉形轡の影響を受けながら菱形・楕円形の両系列が融合した可能性が高い。これはIII段階でも、菱形覆金具系にみられた棘状突起が楕円形覆金具系に確認できることから、両系列の融合が起つたことの証明となるとともに透十字文心葉形轡（X類）で想定した、透十字文心葉形轡II段階での変化と同様、他系列の馬具との融合が起つた可能性が高い。

このように透十字文心葉形轡と車輪文楕円形・心葉形轡は属性が共通するものがあることから、工人集団は近しい関係にあることがわかるが、定型化して大量生産される透十字文心葉形轡のI-2段階にはある程度独立性を保つて生産された可能性が高い。一方で、II段階以降は車輪文楕円形・心葉形轡とともに他形式の轡の変化の方向性とも合致することから、金銅装馬具の生産体制の再編などが生じた可能性がある。

透十字文心葉形鏡板付轡（Y類）との関係 桃崎祐輔氏は、今回筆者が検討した透十字文心葉形轡（X類）と透十字文である特徴が一致する群馬県しどめ塚古墳例や三重県塚山古墳群などの轡（透十字文心葉形轡Y類）を同一系譜に位置づける（桃崎2014）。しかし、方形銜留部と透十字文以外の共通性はほとんどない。特にY類は大型矩形立闇で、銜と引手は鏡板の外側で連結する外接である。また、TK209型式以降のものは、二重銜先環の小畠3号墳例としどめ塚古墳などの8字形銜留金具（註8）を介在させ引手と連結するものであり（大谷2018）、X類とは様相が全く異なる。この8字形銜留金具が採用されるのは、新羅系とされる山梨県古柳塚古墳の唐草文心葉形轡などすべて新羅系の特徴を持つ心葉形轡である。同形式の唐草文心葉形轡には笹塚古墳や御小屋原古墳で方形銜留部を採用している。したがって、X類が倭の伝統と大加耶の影響により成立しているのに対し、Y類はTK10型式期～飛鳥I・II期まで新羅系の特徴を有したまま変遷している。したがって、共通項はほとんどないことから、別系譜と考えるのが妥当である。

	透十字文心葉形轡（X類）	車輪文楕円形（心葉形轡）	透十字文心葉形轡（Y類）
50m以上	<ul style="list-style-type: none"> 千葉県西原古墳（60m） 千葉県法皇塚古墳（54.5m） 摱環頭・象嵌 	<ul style="list-style-type: none"> 埼玉県若王子古墳（103m） 千葉県金鈴塚古墳（100m） 島根県大念寺古墳（100m） 	<ul style="list-style-type: none"> 茨城県風返稻荷山古墳（78.1m） 千葉県城山1号墳（68m） 広島県二子塚古墳（68m） 奈良県鳥土塚古墳（60.5m）
50~20m	<ul style="list-style-type: none"> 埼玉県牛塚古墳（47m） 島根県上塩冶築山古墳（43m？） 円頭・捩環頭・頭椎 鳥取県石州府5号墳（32m） 象嵌 奈良県三里古墳（25m） 鐘形轡・杏葉 京都府牧弁財1号墳（25m） 楕円轡・楕円杏葉 島根県岡田山1号墳（24.5m） 象嵌円頭・三葉・圭頭 長野県小丸山古墳（20m） 栃木県赤麻古墳（20m） 頭椎 or 圭頭？ 	<ul style="list-style-type: none"> 栃木県大山瓢箪塚古墳（46m） 福岡県船原3号墳（40m） 京都府鹿谷古墳（38m？） 埼玉県青塚古墳（37m） 京都府牧正一古墳（34m） 島根県中村1号墳（30m） 京都府黒土1号墳（30m） 福岡県新延大塚古墳（30m） 岡山県王墓山古墳（25m） 	<ul style="list-style-type: none"> 鳥取県小畠3号墳（27m） 福岡県山王山古墳（20m以上） 徳島県ぬか塚古墳（20m） 群馬県しどめ塚古墳（20m）
20m以下	<ul style="list-style-type: none"> 静岡県長福寺1号墳（17m） 鐘形轡 or 杏葉 奈良県護国神社4号墳（10m？） 	<ul style="list-style-type: none"> 長野県武陵地1号墳（17m） 静岡県春岡2号墳（17m） 佐賀県永安寺西古墳（12m） 兵庫県上山5号墳（12m） 	
墳形規模不明	<p>伝・茨城県出土 栃木県大塚新田古墳群 静岡県合代島古墳 静岡県宗小路19号墳 三重県上村古墳（志島10号墳） 兵庫県山崎山1号墳 (福岡県欠山塚古墳群)</p>	<p>茨城県八龍神社 千葉県八代台出土 福岡県岡垣町吉木出土 福岡県香力梶原1号墳 佐賀県小城炭坑跡古墳 出土地不明（関西大学蔵）</p>	<p>静岡県大ヶ谷1-1号横穴墓 三重県塚山古墳群 滋賀県中山古墳 兵庫県香美町伝・油良出土 熊本県才園2号墳</p>

図 10 透十字文心葉形鏡板付轡（X類）と関連する馬具出土古墳の墳形規模と特徴的な副葬品

5 合代島古墳の位置づけ

（1）三累環頭大刀と共に伴するか？

第5章までに、合代島古墳から出土した馬具について報告し、透十字文心葉形轡（X類）の成立過程や展開について概観した。最後に透十字文心葉形轡（X類）が出土した合代島古墳の社会的・階層的な位置づけを探るためいくつか検討し、まとめとしたい。

さて、合代島古墳出土とされる三累環頭大刀（図4）があるが、現状では今回報告した轡が出土した「合代島古墳」と、三累環頭大刀が出土した「合代島古墳」が同一の古墳とは断定できないため、透十字文心葉形轡と三累環頭大刀が同一古墳で共伴する可能性があるかを他の透十字文心葉形轡が出土した古墳での事例を確認する。

図10に、当形式の轡が出土した古墳の墳形と規模を示すとともに、共伴した装飾付大刀を表記した。岡田山1号墳で三累環頭大刀と同様、新羅系とされる三

葉環頭大刀は出土しているが、それ以外では法皇塚古墳の捩環頭大刀、上塩冶築山古墳の折衷系（頭椎）大刀などであり、三累環頭大刀を副葬する古墳は確認できないことから、その共伴関係は非常に低いと言わざるを得ない。

したがって、両遺物が同一古墳から出土した可能性は排除できないものの、残念ながら現状では共伴関係にあったとは断定できない。

（2）透十字文心葉形轡出土古墳からみた合代島古墳

透十字文心葉形轡（X類）は金銅装馬具でありながら、II段階の上塩冶築山古墳、宗小路19号墳を除いて確実に杏葉が伴う古墳はないが、規模は20mを超えるものがほとんどであり、最大は西原古墳（前方後円墳）で60mである。合代島古墳も、西郷氏により報告された合代島古墳（1号墳）から出土したとすれば、20m程度の古墳である可能性が高く、X類の傾

向とが合致する。X類は地域の最大規模の古墳ではないにしても、地域の有力古墳に位置づけられる。

一方で、X類と近しい関係にある車輪文楕円形・心葉形轡は杏葉を伴うことが多い。図10に示した通り、一目瞭然で、車輪文轡・杏葉を伴う古墳のほうが透十字文心葉形轡（X類）出土古墳より規模が大きい。

また、近接して両者が出土している地域の中で比較すると、奈良県平群町の鳥塚古墳と三里古墳、千葉県木更津市の金鈴塚古墳と西原古墳、京都府福知山市牧正一古墳と牧弁財1号墳など、いずれも車輪文轡・杏葉出土古墳が透十字文心葉形轡出土古墳より規模が大きい。

合代島古墳の近在には袋井市春岡2号墳が所在しており、円墳で直径は17m程で、金銅装馬具、装飾付大刀（金銅装・象嵌装）を保有するなど地域の最上位の古墳の一つである。合代島古墳出土遺物の様相は不明であるものの、他地域同様車輪文轡・辻金具が出土した古墳のほうが優位にありそうである。一方、掛川市長福寺1号墳も春岡2号墳に近接するが、鐘形杏葉を保有しており、規模はほぼ同じであることからおおむね同階層であった可能性が高いことがわかる。

したがって、全国的、地域内部の比較でも、これまでの研究で想定されるとおり金銅装轡・杏葉で馬装を構成するほうが金銅装杏葉を伴わない馬装よりも優位であることがわかる。しかし、透十字文心葉形轡は、地域の最大規模の古墳ではないものの地域の有力古墳から出土しており、合代島古墳も地域内では有力古墳であった可能性が高い。

（3）まとめ

合代島古墳とは？ 上述したように『静岡県史』（旧県史）に報告された「合代島古墳」と今回報告した透十字文心葉形轡が出土した「合代島古墳」が同一古墳である確証はなく、また三累環頭大刀が出土した「合代島古墳」とも同一古墳である確証は得られなかった。合代島丘陵の古墳群をみると、規模が大きい古墳は尾根上の古墳であることが多く、また上神増A／B／E古墳群の調査でも丘陵頂部の古墳が副葬品なども豊富であること（静岡県埋文研2010）から、透十字文心葉形轡、三累環頭大刀が出土するにふさわしい古墳は丘陵頂部にあり、今回「合代島古墳」である可能性を指摘した、上神増A1号墳の可能性が最も高いと考える。将来、上神増A1号墳の本格的調査が行われる際の検証課題である。

合代島丘陵の古墳群での合代島古墳 上神増古墳群では、上神増E2号墳から鉄製三葉環頭大刀が、E16号墳から三角穂式鉄鉾が出土し、鈴鏡が出土した古墳も存在する。また、新平山古墳群では金銅装馬具、装飾付大刀などが出土し、TK43～飛鳥II期まで有力な古墳の築造が続くことから、この地域が6世紀後半以降終末期まで畿内王権にとって重要な地域であったことは疑いのない事実であろう。

この狭い地域で三累環頭大刀、三葉環頭大刀と倭の装飾大刀の主流からは外れた新羅系装飾付大刀や新羅の影響を受けた透十字文心葉形轡が出土していることは、この地域がやや特殊な地域として位置づけられていた可能性を想定したい。それは島根県岡田山1号墳で三葉環頭大刀と透十字文心葉形轡の共伴するが、桃崎祐輔氏は「額田部臣」象嵌銘から岡田山1号墳の被葬者を額田部臣とし、透十字文心葉形轡を額田部氏との関係が深い馬具としていることは証明できないにしても、合代島丘陵の古墳群の被葬者集団は岡田山1号墳の被葬者が有していた性格の一部を複数で体现していた可能性がある。

謝辞

当該資料を元静岡大学教授滝沢誠氏に紹介していただきました。また、出土遺物の調査に際し、静岡大学教授篠原和大・准教授山岡拓也両氏に御高配いたくとともに、資料の公開を快諾いただきました。さらに、類例調査等にあたり天石夏実氏、内山敏行氏、北嶋未貴氏、齊藤大輔氏、白澤崇氏、鈴木一有氏、田村隆太郎氏、宮原佑治氏、宮代栄一氏、静岡市埋蔵文化財センター、袋井市教育委員会にご協力いただきました。明記して深謝いたします。

補記

脱稿後、齊藤大輔氏より福岡県那賀川市片縄山古墳群丸ノロIV-2号墳から方形銜留部の楕円形（あるいは心葉形）轡が出土していることをご教示いただいた。鉄製透十字文心葉形轡（Y類）で大型矩形立闇をもち、円形銜留金具・遊環をもつなど、しどめ塚古墳や小畠3号墳例に近いことから、TK43～TK209型式ごろに位置づけられる可能性が高い。透十字文心葉形轡（X類）への影響はほとんどないと考えられる。

那珂川町教育委員会 2003 『片縄山古墳群』

註

1 ここには、『静岡縣史』の西郷藤八氏による報告を再録する（静岡縣 1930）。

「野部村合代島の古墳」

野部村合代島は磐田原の最北端に位し、現今の天龍川より凡そ二糠餘離れたる處にある。古墳は野部村役場の東南一糠餘の丘陵上に群集して存在す。その最も大なるは標高一〇五米二の三角點の建てられた地點附近にあり、その餘は北の尾根に沿うて正南又は東南に向つて羨門がある。何れも圓墳らしいが、石材採取の目的を以て發掘したので大部分崩されてゐる。今最高部にあるものより北に連なる四墳の現場について略述しよう。（便宜上一・二・三・四號墳と名づく。）

一號墳 標高一〇五・二米の地點にある圓墳で、明治三十年代に地主青野貞一氏の先代の承諾を得て、濱松あたりの塚堀（ママ）（埋蔵物を盗掘し又は仲介して骨董商と取引をなす者）が奥壁に近き天井石を除去して玄室内に入り、刀身・玉類を得たが、地主には刀身殘缺のみを残して、其他は持去つたといふので、如何なる出土品があつたか判らない。青野氏宅に藏してゐる刀身は、全く朽損して原形を認められないが、直刀にして鑑孔の残れるものもあり、細片となつてはゐるが金銅製刀装具の存在してゐたことのわかるものもある。

石櫛は横穴式で、羨門並に羨道は手をつけず、墳丘の中央を約一・五米掘下げ、天井石を除いて内部を開いたもので、玄室の一部が露はれてゐる。即ち長二・一米・幅二・二五米・高さ一・七米、比較的小なる割石を以て積み、奥壁にも大なる石を用いてない。而して玄室の一部及羨道の埋没してゐる箇所は凡五米で、羨門は東南に向つてゐる。

二號墳 一號墳の北々東約五十米の尾根續きにあり、天井石等大なる石材は他へ移されて、側壁に積んだ丸石の一部が残つてゐる。羨道はやゝ東に傾きたる南に面し、底面の長二・四二米・幅九〇糎、これも一號墳と同時代に掘られたものであるが、出土品については不明である。

三號墳 二號墳の北隣にある。これも二號墳と同様に、巨石は持去られて割石のみ殘存してゐる。石櫛の長七・二七米・幅一・〇五米で。（ママ）天井石は除かれてない。羨門は南面してゐる。これからは須恵器と刀身が出たといふ。

四號墳 これは三號墳の更に北にあつて、石櫛も比較的殘存部が多く、全形を窺ふことができる。

石櫛は天井石の落ちてゐること、側壁の大部分除かれてゐることは前者と同じで（ママ）あるが、當時の發掘者鈴木鹿藏氏の説明によつて、原状を彷彿することが出来た。

石櫛は割石を用ひ、奥壁には大なる石を用ひてある。長一〇・九米・幅一・二米・高さ一・八二米、玄室と羨道との區別は崩れて不明、羨門はやゝ東に傾ける南に向ひ、高六〇糎・幅九〇糎あつて、二個の大石を立てゝ塞いであつた。なお櫛の内部は多くの土で埋まつてゐたといふ。これが發掘されたのは明治三十年代で、左記の出土品は奥壁より一・八米手前にあつた。今散佚することなく東京帝室博物館に藏せられてゐる。

1、水晶製切子玉 四 長三〇糎内外。 2、琥珀製棗玉 二 長各三〇糎。 3、ガラス製丸玉 一 径一二糎餘。 4、ガラス製小玉殘片 八 5、小玉 六 蛇紋岩製三個 滑石製一個 玻璃製二個 径各七糎。 6、ガラス製小玉 四三二 7、銀環 二 表面腐蝕し、径各二四糎。

8、刀身殘片 八 鐵製。 9、蓋 四 須恵器、口徑一三糎乃至八・七糎。 10、長頸壺 一 同 高二一・二糎 胴徑一五・二糎 口邊缺損。 11、臺 一 同 脚部高六・七糎 径一五・一糎。 12、脚付盃 一 同 高七・五糎 口徑八・四糎。 13、長頸壺ノ頸 一 同 高一・二糎 径八・五糎。 14、脚付長頸壺 二 同（一）高二五・八糎 同徑一四・五糎（二）頸部以上欠損 高二三・七糎。 15、高坏殘缺 一 同 高六糎 口徑一五・一糎。 16、摘附ノ蓋 一 同 高七・五糎 口徑一〇糎。 17、平瓶 三 同 高一五・一糎乃至一六・二糎。

鷲山恭平氏の報に據れば、二俣町の醫師平山氏は野部村合代島古墳出土と稱して上の如き環頭大刀柄頭を藏す。」

2 筆者は『合代島丘陵の古墳群』（静岡県埋文研 2010）の合代島丘陵の概要（14 頁）では、旧県史（静岡縣 1930）の「合代島 1 号墳」を上神増 A 1 号墳の可能性が高いとしたが、「合代島 2 ~ 4 号墳」については対応する古墳名を想定しなかつた。旧県史の記述から 1 号墳から 50 m に 2 号墳、その北隣に 3 号墳、4 号墳は 3 号墳のさらに北で割石を用いる横穴式石室であるとの記載を参照すれば、2・3 号墳は上神増 A 10・11・12 号墳のうちの 2 基、4 号墳は合代島 B 3 号墳の可能性が高い。

なお、合代島 1 号墳の可能性が高い上神増 A 1 号墳は現地踏査の結果、瓢形の丘陵頂部に築造されており、30 m 程度の前方後円墳の可能性があるが、円墳の場合でも 20 m 程度の規模はあったと想定する。

さらに、合代島古墳出土とされる三累環頭大刀は丘陵頂部に築造された合代島 B 3、上神増 A 1・6 号墳のいずれかから出土した可能性が高い。

3 このほか上神増古墳群から出土した可能性が高い鈴鏡が旧県史（静岡縣 1930）に報告されており、新平山古墳群（豊岡村 1993）で鏡・金銅装馬具・装飾付大刀が出土していることも合わせると合代島丘陵の古墳群は、6 世紀後半以降有力な古墳が集中していた可能性も考慮する必要がある。

4 天石夏実氏の御高配により静岡市埋蔵文化財センターにて実見した。

宗小路 19 号墳では、板状辻金具、半球状鉢辻金具、金銅装心葉形杏葉、鉸具造立闇環状鏡板付轡などが出土している。したがつて、十字文心葉形轡と心葉形杏葉が組合せとなる可能性が高い。

なお、『東海の馬具と飾大刀』（東海古墳文化研究会 2006）では「宗光寺 19 号墳」としたが、「宗小路 19 号墳」が正式名称である。ここでは正式名称に訂正する。

5 前稿（大谷 2013）は資料紹介にとどまり、その際継続的に大ヶ谷横穴墓群金属製品の研究を進めるとしたが、この報告で、その成果の一部を報告するものである。

6 袋井市教育委員会 白澤崇・北嶋未貴氏のご教示。

7 このほか轡が出土していないため、系列は今後検討する必要があるが、2 鈸二段に鉸を配置する鉤状吊金具を有する千葉県金鈴塚古墳出土の車輪文杏葉などでも確認できる。

8 筆者は前稿（大谷 2018）で、「8 字形遊環」としたが、鏡板を衡に固定するための金具であることから「遊環」は適切な名称ではないことから、神氏が提唱する「8 字形衡留金具」（神 2017）とする。

引用・参考文献

【論文】

- 諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』 雄山閣
- 石川正之助・佐藤信孝ほか 2010 「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編 高崎市
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 内山敏行 2012 「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳II』豊橋市教育委員会
- 内山敏行 2013 「馬具」『古墳時代の考古学』8 同成社
- 内山敏行 2017 「栃木県域の馬具と副葬古墳」『馬具副葬古墳の諸問題』東北・関東前方後円墳研究会
- 太田博之 2013 「東日本における古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と首長墓の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 国立歴史民俗博物館
- 大谷宏治 2010 「上神増A・B・E古墳群の評価」『合代島丘陵の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2013 「牧之原市大ヶ谷横穴墓群出土金属製品について」『研究紀要』2 静岡県埋蔵文化財センター
- 大谷宏治 2018 「東平1号墳副葬大刀と馬具からみた被葬者像」『伝法東平1号墳』富士市教育委員会
- 川江秀孝 2002 『続日本古墳大辞典』東京堂出版
- 齊藤大輔 2017 「古墳時代刀剣研究史」『土曜考古』39 土曜考古学研究会
- 白井久美子 2002 「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団
- 神 啓崇 2016 「西都原古墳群出土心葉形十字文鏡板付轡・心葉形三葉文杏葉の再検討」『七隈史学』18
- 神 啓崇 2017 「馬具の構造変化とその意義—西堂古賀崎古墳出土馬具の検討」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会
- 第18回播磨考古学研究集会 2017 『武器からみた古墳時代の播磨』
- 田村隆太郎・鈴木一有ほか 2003 「遠江長福寺1号墳の研究」『静岡県考古学研究』33号 静岡県考古学会
- 千賀 久 2003 「日本馬具の系譜を考える」『古墳時代の馬との出会い』 檀原考古学研究所付属博物館
- 東海古墳文化研究会 2006 『東海の馬具と飾大刀』
- 東北・関東前方後円墳研究会 2017 『馬具副葬古墳の諸問題』
- 西山良一 1987 「馬具の検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
- 花谷 浩 2018 「鳥取県岩美町小畠古墳群の馬具」『島根考古学会誌』35
- 古川 匠 2007 「6世紀における馬具の国産化について」『古文化談叢』57 九州古文化研究会
- 松尾充晶 1999 「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
- 宮代栄一 1994 「佐賀県出土馬具の研究」『九州考古学』69 九州考古学会
- 宮代栄一 1995 「宮崎県出土馬具の研究」『九州考古学』70 九州考古学会
- 宮代栄一 1996a 「倭人たちの馬装-面繫を中心に」『黄金に

魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
宮代栄一 1996b 「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅

せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
宮代栄一 1999 「熊本県才園古墳出土遺物の研究」『人類史

研究(鹿大考古)』11 人類史研究会

宮原佑治 2015 「上村古墳の資料調査報告」『志摩市志島古墳群検討会資料』

宮原佑治 2016 「志島上村古墳の研究—志摩における後期古墳の研究(1)ー」『専修考古学』15 専修大学考古学会

桃崎祐輔 2014 「馬具からみた九州の地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会

【報告書・都道府県市町村史等】

飯塚市教育委員会 2014 『山王山古墳』

壱岐市教育委員会 2005 『笹塚古墳』

出雲市教育委員会 2012 『中村1号墳』

檀原考古学研究所 1977 『平群三里古墳』奈良県教育委員会

霞ヶ浦町遺跡調査会 2000 『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会

関西大学文学部考古学研究室 1992 『紀伊半島の文化史的研究』考古学編

御所市教育委員会 2002 『巨勢山古墳群III』

小林三郎・熊野正也編 1976 『法皇塚古墳』市立市川博物館

ゴーランド・コレクション調査プロジェクト 2019 『鹿谷古墳の研究』

静岡県 1930 『静岡県史』第1巻

静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘陵の古墳群』

島根県教育委員会 1987 『出雲岡田山古墳』

島根県古代文化センター 1999 『上塩冶築山古墳の研究』

城陽市教育委員会 2007 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』

石州府古墳群発掘調査団 1989 『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会

豊岡村史編さん委員会 1993 『豊岡村史』資料編3

日田市教育委員会 2000 『吹上遺跡・天満古墳』

日田市教育委員会 2005 『朝日天神山古墳群』

図・写真の出典

図1 (静岡県埋文研 2010) より改変して加筆

図2 (静岡県埋文研 2010) より改変してトレース

図3 筆者トレース

図4 (静岡県埋文研 2010) より改変して引用

図5 筆者作図・トレース

図6 (松尾 1999) から抜粋して加筆

図7・8・1・8・2 図面の出典は図中に記載。(松尾 1999、桃崎 2014、大谷 2018) を参考に作成。

図9・10 筆者作成

写真1・2 筆者撮影